



## 「善人」寺岡連（東京都）

「こんにちは。学習教材のご紹介をしにやってきました。ご家族の方、いらつしやいますか？」

丁寧な口調でそう言われたので、家にいた母親を呼んだ。私が中学三年のときだ。相手が訪問販売員ということで、母は最初、ちよつと抵抗があつたようだが、物腰の柔らかい姿勢と丁寧な口調だったので対応に出た。

スーツを着て教材の説明をしているのは四十代の男性であり、彼が一人で来た。母はしばらく玄関口で立って話を聞いていたが

「まあ、上がってください」

と男性を居間に通した。今でも覚えているが、その日は私の家庭訪問の翌日だった。前日、担任の教師が私の家に来たのだ。その関係で、障子がすべてキレイに張り替えられており、それもあって、母は男性を部屋に上げる気になつたのかもしれない。

男性は熱心を持ってきた学習教材の説明をし、母も熱心にそれを聞いている。





家庭訪問では、さんざんだった。模擬試験の結果が悪く、担任からは

「志望校の合格はまず無理でしょう」

とまで言われてしまった。母も落ち込んだと思う。販売員の説明をじっくり聞いたあと、こんなことを言った。

「おたくの学習教材が良いのか悪いのか、まだ私には分かりません。一度、息子の学力レベルをみてくださいますか？ 息子のレベルに合っていたら考えます」

販売員の男性は「喜んで」と笑顔で言ったあと

「ぼっちゃん。いつもどんな勉強をしているのかな？」

と言いながら、一緒に私の部屋までやってきた。私は普段つかっている問題集や単語帳などを見せた。

「ほうほう。で、ぼっちゃんは、この問題集をどれくらい理解したのかな？」

そう尋ねながら、スラスラと英単語と英熟語をいくつかノートに書いてみせた。

「これらの単語と熟語、意味は分かるかな？」

私には、すべて分かった。英語に関しては、ほとんどの単語と熟語は暗記していた。





「この単語はこういう意味で、この熟語はこういう意味だと思います」  
すると、販売員の男性は

「え！ 分かるの！」

と驚いた。母から聞いた成績の悪さから、このレベルの単語・熟語は分からない  
と思っていたようだった。

私はめっぽう本番に弱かった。きちんと暗記していても、テスト本番になると、  
頭が真っ白になってしまう。簡単な数学の問題でも、先生に当てられて大勢の前で  
答えるときになると、緊張して何も言えなくなったりした。

そんなことを話すと、男性はしばらく目をつぶって考えていた。そして、私の顔  
をじっくり見て言った。

「ぼっちゃん。キミに必要なのは、学習教材なんかじゃない。自信だ。僕ならで  
きるという自信こそが必要なんだ」

なんか、おかしいなと思って私は言った。

「おじさん。参考書売りに来たんでしょ？ そんなこと言ったら、商売になら  
ないよ？」





人の良い販売員は、「あっ」と口をふさいだあと

「あっはっは！ こりゃ一本とられたな！」

と大声で笑った。それにつられて私も笑った。

ひとしきり笑い合ったあと、販売員はこんな経験を話してくれた。

「いろんな家庭をまわっているけど、成績が悪い子というのは、学力が足りないというより自信が足りないというケースの方が多いいんだ。自信がないと、本当は能力があっても自分でそれにブレーキをかけてしまう。そんな子がすごく多いいんだ」

そんなことを言ったあと、彼は私の肩をポンと叩いて

「キミなら大丈夫。志望校に合格できるよ」

そう言って、帰っていった。お茶とお菓子を出そうとしていた母に対して

「あのぼっちゃんなら心配ないですよ」

と言った。帰りしな、革靴を履きながら

「あく楽しかった」

とつぶやいたのを今でも覚えている。

あの販売員は、根っからの善人だったのだろう。教材を売ることより、出会った





子供たちを勇気づけることを生きがいに行っているように見えた。退屈な受験勉強の生活で、あるとき出会った販売員との触れ合いは、私には楽しい思い出として残った。

四十歳を過ぎた今、私はさび付いた英語力を磨き直したいと思っている。そして、こう思うのだ。

あの人が出来ないかなあ・・・と。

【平成二七年度・優秀賞】

